

## インタビュー

JFE商事のスリランカ・  
ビジネスと国際交流JFE商事株式会社  
船舶部 副部長こめのい ただし  
米ノ井 正

外務省は、例年、日本と諸外国との友好親善や交流促進に大きな貢献をした個人・団体に対して外務大臣表彰を行っています。平成23年度の国内の個人受賞者として、商社業界から米ノ井 正氏（JFE商事(株)船舶部副部長）が、スリランカ駐在時に取り組まれた合気道指導を通じた友好親善の功績により表彰されました。そこで、今回のズームアップでは、スリランカでの合気道指導を始められた経緯や現地での指導の様子その他、現地で携わってこられた事業、日・スリランカ間のビジネス動向や今後の展望などについて、米ノ井氏にお話を伺いました。

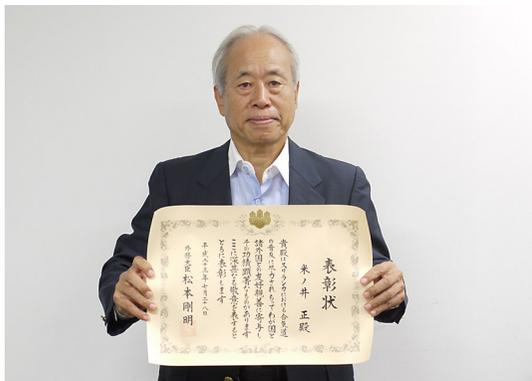
—このたびはスリランカでの合気道指導を通じた友好親善のご功績により外務大臣表彰され、おめでとうございます。現在のお気持ちをお聞かせください。また、スリランカで合気道の指導を始められた「きっかけ」をお聞かせください。

このような賞を頂くのは初めてですので、自分としては過分な賞を頂いたと恐縮しています。合気道は大学生の時から始め、業務の関係で中断した時期もありましたが、現在は六段を取得しています。フィリピンのマニラ駐在時にも現地で合気道を指導したことがあり、スリランカとの友好親善に役立つのであればマニラでの経験を活かして合気道の指導をしたいと思い、2001年

から2011年3月の帰国まで指導していました。

—スリランカでの合気道の指導を行うに当たって、どのようなご苦労がありましたでしょうか？

合気道には畳のある道場が必要ですので、まずはその道場を探すのに苦労しました。半年ほど、なかなか適当な所が見つけれなかったのですが、2001年のスリランカでの新年会で、たまたま隣に座っていた、警察から出向されていた日本大使館の書記官の方から、スリランカで柔道を指導されているというお話を伺い、その方を通じて紹介いただいたスリランカ柔道連盟の会長のご厚意で、柔道場を週3回、無償で借りることができるようになりました。



—現在、スリランカではどのくらいの方数が合気道に親しまれているのでしょうか。また、どのような職業、年齢層の方が参加されているのでしょうか？

全体で100-150名ほどではないかと思いません。私が指導した道場には60名ほどの登録者がいましたが、有段者は25名ほどで、日本の財団法人合気会本部道場から免状を得た人たちです。1名を除いて全て私が本部道場の委任を受けて昇段審査をして、現地で免状を取得しました。参加者の職業はさまざまで、IT関係者や造船所に勤めている方の他、プロのカメラマンもいましたが、日本の文化や空手などの武道に興味を持つ人が多く参加していたように思います。また、若干名ですが女性の参加者もいました。スリランカ陸軍や空軍からも指導してほしいという要請を受けたのですが、本来の仕事ができなくなってしまうため、それはお断りしました。道場では、基本的には私一人で指導をしていましたが、私が不在のときには有段者に代理で指導をしてもらうようにしていました。

—合気道の指導において、現地の方とコミュニケーションを図る上で何かご苦労はありましたでしょうか。

スリランカは多宗教の社会であるため、道場には仏教徒の他にもイスラム教、キリスト教、ヒンズー教など、いろいろな宗教の背景を持つ方が来ていました。例えば、道場には合気道の創始者「植芝盛平」の肖像を掲げ、稽古を始める前に、肖像に拝礼をするように指導していましたが、拝礼をしない人がいました。なぜ拝礼をしないのかと聞くと、「イスラム教徒であるから、アッラーの神以外には拝礼をしてはいけない」と。そこで、「これは合気道の創始者に対する尊敬を表す儀礼であって、宗教的な意味ではない」という説明をしたところ、その後は、拝礼をするようになりました。

また、稽古は週3回行っていたのですが、現地の人たちには稽古前に道場の畳を拭くという習慣がなかったため、稽古をしていると道着が

真っ黒になっていました。そこで、「稽古の前には畳を清掃する、外から道場に入ってくる時には雑巾ではだしを拭いてから畳に上がる」という基本的な指導が必要でした。習慣の違いから、こうした点の指導の徹底には時間がかかりました。

—合気道を通じて本業のビジネスにおいても何か良い効果はありましたでしょうか。

現地ではテレビ局の依頼で「合気道教室」を放映していたことがあり、また、年1回、合気道のデモンストレーション（演武会）を開催しているのですが、これも全て2-3時間の番組としてテレビ放映されていました。そのため、スーパーなどに出掛けた際にも「あなたはテレビに出ていた人ですね」と声を掛けられることもありました。また、客先にも「テレビを見たよ」と言ってくれる人がいました。その客先が別の客先に、私のことを「ビジネスで来ているだけではなく、武道の先生としても活躍している人」と紹介していただき、単なるビジネスマンではなく、日本とスリランカの文化交流にも貢献している信頼のおける相手として認めていただきました。

—その本業のビジネスについてお伺いしたいのですが、ご所属の船舶部では、どのようなお仕事をされてきましたか。また、スリランカではどのようなお仕事に従事されていましたか。

まず当社船舶部では主に船舶の売買、用船仲介、船舶融資等の業務に携わってきました。

スリランカでは、60MWの発電能力を持つバージ方式（浮体式）発電設備による、スリランカ電力庁への売電事業に従事しました。これは2000-15年までのBOO方式（建設・所有・運営）による契約で、電力不足が続くスリランカにおいて国家プロジェクトとして位置付けられていました。同事業には当社が50%、三井造船(株)が50%出資し、国際協力銀行（JBIC）からも資金調達し、2000年7月から操業を開始しました。すでに操業開始から10年がたち、JBICへの返済は2010年6月に終えています。



発電設備の管理は、デンマークにある三井造船株式会社の子会社BWSCの現地法人が、スリランカ人エンジニアと共に行っています。バージ方式の発電設備はフィリピンなどでも見られますが、スリランカ国内ではこれ1基だけです。操業当初は、スリランカ全体の電力供給の8%ほどを占めていましたが、現在は水力発電など他の発電設備が増強された結果、4-5%程度となっています。

**一スリランカでの事業は、紛争による政情不安により治安面でのご心配があったのではないのでしょうか。また、どのようなご苦労がありましたでしょうか。**

赴任した2000年ごろは、現地で自爆テロが頻発していました。2002年から2年間は、政府軍と反政府軍との間で停戦協定がありましたが、それが破棄されて、再び紛争が激しくなりました。しかし、2009年5月に反政府軍が壊滅され、現在は紛争が収まった状況で落ち着いています。

紛争の激しかった当時は、スリランカ海軍から「発電施設も反政府軍の攻撃目標となる危険性が高い」との警告を受け、警備を厳重にするようにとの指示が出ていました。また、爆弾を積んだ反政府軍の軽飛行機が港まで飛んできたこともあり、身の危険を感じることもありました。

その他、スリランカ国税局との税金支払いの協議の他、一時スリランカ電力庁の資金繰りが厳しくなった際に支払い面での協議などで苦労したことがありました。

**一日・スリランカ間のビジネスの動向はどのような状況でしょうか。また、今後、スリランカにおいて、貴社としてはどのようなビジネスをお考えでしょうか。**

最近、中国の石炭火力発電や港湾等のインフラへの進出が顕著ですが、日本も長年にわたり水力発電建設、道路、港湾建設等のインフラ整備などで大いに貢献してきました。現在、スリランカ日本商工会には60社ほどが登録しており、陶磁器製造の他、縫製、IT関係など、さまざまな企業が進出しています。私は2008-09年ごろにスリランカ日本商工会の会頭を務めていましたが、現日本大使の提唱もあり、スリランカに対する投資環境整備の必要性をスリランカ政府に訴えるため、大使館、商工会、ジェトロの協力によって「官民合同フォーラム」を立ち上げました。その後も同フォーラムは継続され、税制、労働の問題など、投資環境改善に向けた意見交換がスリランカ政府との間で行われています。

現在、当社としては三井造船と協力し、バイオマスなどの再生可能エネルギー分野における事業の可能性を探っている状況です。また、スリランカは、インドという広大な経済的後背地を持つ他、インドとは自由貿易協定を締結しているため、南アジア地域を広く市場として捉えることができ、他社のスリランカへの進出でも、当社の同地での10年の経験を活かし、協力できる機会があると思います。

**一最後に、今後の合気道とビジネスに対する抱負をお聞かせください。**

やはり今後も合気道の指導は続けていきたいと思っています。2012年には合気道本部道場からもスリランカへ指導に行くという話があるので、指導者派遣のためのお手伝いをしたいと思っています。また、本業のビジネスについては、スリランカへの投資案件や発電事業関係で何らかのお手伝いができればと思っています。

(聞き手：広報グループ 石塚哲也) 